

厚生省神経疾患研究委託費

筋ジストロフィー症の療護に関する臨床社会学的研究

昭和54年度研究成果報告書

班長 国立療養所松江病院 中島敏夫

昭和55年3月

目 次

序	班長 中島敏夫	1
筋ジストロフィー症の療護に関する臨床社会学的研究		2
国立療養所松江病院	班長 中島敏夫	
筋ジストロフィー症の心理障害、生活指導の研究のまとめ		5
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三	
PMDの知能に関する研究 — 有意味語及び無意味音から連想されることばに関する考察 —		6
国立療養所八雲病院	篠田実・三好力・阿部一男 増田寿雄	
筋ジストロフィー症児の言語能力についての研究(その2)		8
国立療養所西別府病院	三吉野産治・寺田真弓・吉良陽子 秋吉雅子・安川郁子	
筋ジストロフィー症における心理障害と知能指数との関係		10
愛媛大学医学部	野島元雄・佐藤勝・井上良一 柿本泰男・堀口淳	
Duchenne型PMD者の記憶能力について		12
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三・小笠原昭彦・片山幾代 野尻久雄・宮崎光弘	
進行性筋萎縮症児の視知覚能力の発達について(第2報)		14
国立療養所西多賀病院	湊治郎・藤井啓子	
ドションス型筋ジストロフィー症児の知覚に関する研究		16
国立療養所下志津病院	斎藤篤・松下登・関谷智子 太田有時	
千葉大神経内科	松山幸孝	
DMP児の知能に関する研究 — 視覚的側面よりみた低IQ児の知能 —		18
国立療養所南九州病院	乗松克政・西村喜文	
DMP児の心理的研究 — DMP児の達成動機の研究 —		21
国立療養所南九州病院	乗松克政・杉田祥子	
「DMP児の欲求について」(中間報告)		23
国立療養所再春荘	小清水忠夫・末竹寛子	
Duchenne型PMD者のボディ・イメージ — QDA法による四肢、体幹のイメージ評価 —		24
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三・片山幾代・野尻久雄 宮崎光弘・小笠原昭彦	

Duchenne型PMD者の時間評価	27
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三・野尻久雄・片山幾代 宮崎光弘・小笠原昭彦
Duchenne型PMD患者のRorschach Test 初発反応時間の検討	28
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三・宮崎光弘・片山幾代 野尻久雄・小笠原昭彦
箱庭遊戯による患児の無意識世界の評価	30
国立療養所兵庫中央病院	新光毅・中西孝
P-Fスタディを実施して	33
国立療養所宇多野病院	森吉猛・鞠山紀子・磯本峰億
CAT検査を施行しての結果と考察	35
国立赤江療養所	林栄治・西公郎
DMP患児(者)の心理障害発現予防のため、心理障害をひき起こすと考えられる要因についての調査、 検討	36
国立療養所川棚病院	中沢良夫・井上幸平・中野俊彦
病状進行に伴う心理的变化に関する縦断的研究	38
国立療養所八雲病院	篠田実・阿部一男・三好力 増田寿雄
病棟内における心理障害を招来する原因の検討	41
国立療養所沖縄病院	大城盛夫・勝連盛伸
進行性筋ジストロフィー症患者にみられる心因反応について	42
国立療養所箱根病院	村上慶郎・稲永光幸
当施設における低IQ児増加の要因分析	43
国立療養所再春荘	小清水忠夫・石本由紀男
PMD者の脳波異常(とくに14.6% positive spikeとprolonged spindle)と精神症状、 IQとの関連について	44
愛媛大学医学部	野島元雄・佐藤勝・井上良一 堀口淳・柿本泰男
国立西別府病院	三吉野産治
筋ジストロフィー症患者の親子関係の研究	46
国立療養所刀根山病院	堀三津夫・白神潔
筋萎縮症者の家族関係	50
国立療養所箱根病院	村上慶郎・森田庸子
筋ジストロフィー症の親子関係(共同研究中間報告)	51
国立療養所八雲病院	篠田実・三好力・阿部一男 増田寿雄

西多賀病院外来受診患児(者)の在宅生活に関する研究	55
国立療養所西多賀病院 湊 治郎・後藤親彦・浅倉次男	
問題行動児の生活指導(コミュニケーションを中心に)	59
国立療養所東埼玉病院 井上 満・柿崎好江・川上範子	
吉岡桂子・山本訓子・川俣美代子	
山川和正・矢萩悦・山中浩司	
7-北看護婦一同	
DMP患児の性処理について	61
国立新潟療養所 高沢直之・檜出直木	
PMD者の社会性発達とその近接領域の調査研究	63
国立療養所兵庫中央病院 新光 毅・荒井道子	
PMD児(者)の生活指導に関する研究—PMD児(者)の適性についての小考察(2)—	67
国立療養所西多賀病院 湊 治郎・浅倉次男	
宮城教育大学 佐藤 捷	
低IQ児の遊びの現状と問題点(グループ療法を試みて)	70
国立新潟療養所 高沢直之・沢田千代乃・海津恵子	
大矢里美	
中学卒業生低IQ者の作業指導による心理面の一考察	71
国立療養所兵庫中央病院 新光 毅・小西史子・荒井道子	
龍見代志美・佐野随風・中西孝	
森島尚子	
先天型筋ジストロフィー児の指導	73
国立療養所松江病院 中島敏夫・飯塚治枝・森山紀子	
高等部在学中の患者の生活指導	75
国立療養所宇多野病院 森吉 猛・藤木るり子・高橋邦枝	
山崎カツヨ	
未就学児の保育実践	76
国立療養所沖縄病院 大城盛夫・松田江利子・吉浜尚美	
音楽活動による集団力動(第2報)	77
国立療養所箱根病院 村上慶郎・森田庸子	
筋ジス病棟のグループ療法を実施して—グループ討論をとおしての一考察—	78
国立新潟療養所 高沢直之・青山良子	
病棟内における患者間のリーダーシップ	80
国立赤坂療養所 藤井舜輔・細川晋一・中島健爾	
渡辺 亨	

DMP成人患者の日常生活におけるサークル活動の現状と問題点	81
国立新潟療養所	高沢直之・亀井俊治
余暇の利用を通しての遊びにおける仲間作りと遊びの質の向上	83
国立療養所川棚病院	中沢良夫・平尾智由子・力石富子 堀田五月
サークル活動を通じて	84
国立療養所宇多野病院	森吉 猛・高橋邦枝
中学卒業後の生活指導 — 青年学級を試みて —	85
国立療養所再春荘	小清水忠夫・五丁光江・葛城令子 前田直子
PMD患児(者)のプレイホールの有効な利用法の検討	86
国立療養所西多賀病院	湊 治郎・菅井武夫
PMD者に対する農耕の試み	88
国立療養所東埼玉病院	井上 満・石坂踐生・風間忠道 鈴木貞夫・石原伝幸
筋ジストロフィー患者の余暇について — ビータッチ手芸を試みて —	90
国立赤坂療養所	藤井舜輔・矢ヶ部和代・江口喜久子
筋ジストロフィー症の療護に関する機械器具の開発のまとめ	93
愛媛大学医学部整形外科	野島元雄
DMP長期臥床児の食事自助具の考案	94
国立療養所東埼玉病院	井上 満・成富明子・風間忠道 石塚マツエ・石坂踐生・瀬田ヤマ 小林美知代・高見沢文子
進行性筋ジストロフィー症病棟の避難用具の工夫	96
国立療養所八雲病院	篠田 実・加藤晴一郎・湯浅柄美子 野口房子・大村サツキ・古川悦子 佐藤直従
手関節に拘縮をきたしたDMD児にナースコールプザーの改良を試みて	98
国立療養所東埼玉病院	井上 満・大野美佐子・樋口光江 厚木智子・磯貝紀久枝・高橋一美 細谷和子・上野山せい子・後藤雪美 高橋孝子・斎藤トミ・松木きみえ 西條美江・藤原冊子・松浦涼子 砂原美紀子・浜崎睦美・和田明子 黒須ミツイ

PMD児（者）の作業療法	101
国立療養所下志津病院	斎藤 篤・松下 登・太田 有時 杉山 浩志・田中 孝幸
末期筋ジストロフィー症の作業療法	103
国立療養所箱根病院	村上 慶郎・大木 啓子・伊原 幸枝 古内 文夫
日常生活に関連した訓練指導のあり方 — 障害度78患者用ADL検査表作成	104
国立療養所南九州病院	乗松 克政・新屋 正信・後藤タミ子 西村 喜文・吉永 京子
筋ジストロフィー症の足の変形の検討	107
国立療養所下志津病院	斎藤 篤・森尾 昭
茨城大学保健体育学教室	服部 恒明
成人筋ジストロフィー患者の足底圧力及び躯幹動揺についての研究	108
国立療養所箱根病院	村上 慶郎・長能 常利・萩原 利昌
筋ジストロフィー患者用BFOの改良試作	110
国立徳島療養所	松家 豊・八木 省次・奥村 建明 小山 義一・鈴木 和恵・小林 計 白井 陽一郎・早田 正則
徳島大学教育学部加工学教室	松永 強 右
Duchenne型筋ジストロフィーに対する靴型補装具の研究開発 — 足踏み動作、足跡の解析 —	112
国立療養所鈴鹿病院	河野 慶三
名古屋市立大学病院理学療法部	野々垣 嘉男
岐阜大学医学部反射研	林 良一
名古屋市立城北病院整形外科	榊原 喜一
山路整形	山路 兼生
PMDの躯幹、四肢変形に対する予防および改善装置の開発	113
国立療養所西多賀病院	湊 治郎・五十嵐 俊光
Wheel Bearings を使用しての移動補助具について	115
国立療養所医王病院	松本 勇・正木 不二磨
移動（介助）用具の工夫	117
国立療養所再春荘	小清水 忠夫・境 勇祐・上野 和敏 永田 仁郎・岡元 宏
筋ジストロフィー症児に適した車椅子の選び方	119
国立療養所再春荘	小清水 忠夫・上野 和敏・境 勇祐

筋ジストロフィー症に適したリクライニング型電動車椅子	120
国立療養所下志津病院 斎藤 篤	
西平技研 西平 哲也	
脊柱変形予防のための起立式電動車椅子の改良	122
国立療養所西奈良病院 岩田 真朔 ・ 橋本 孝司 ・ 秋山 弘之	
電動式起立車の開発	123
国立徳島療養所 松家 豊 ・ 早田 正則 ・ 奥村 建明	
白井 陽一郎 ・ 川合 恒雄 ・ 中西 誠	
PMDの各種動的起立台の開発	126
国立療養所西多賀病院 湊 治郎 ・ 根立 千秋 ・ 五十嵐 俊光	
筋ジストロフィー症の脊柱変形の検討とその予防と治療	127
国立療養所下志津病院 斎藤 篤 ・ 森尾 昭	
茨城大学保健体育 服部 恒明	
脊椎変形予防と矯正装具の研究	129
国立療養所西別府病院 三吉野 産治 ・ 吉田 祐三 ・ 加藤 淑子	
渡辺 春一	
筋ジストロフィーの脊柱変形予防および矯正装具の研究	131
国立徳島療養所 松家 豊 ・ 白井 陽一郎 ・ 奥村 建明	
小山 義一 ・ 鈴木 和恵 ・ 小林 計二	
八木 省次	
筋ジストロフィー症における歩行用下肢装具の改良 躯幹保持装具の開発に関する研究	134
愛媛大学医学部整形外科 野島 元雄 ・ 首藤 貴 ・ 矢野 元男	
愛媛大学医学部理学療法部 大塚 彰 ・ 赤松 満	
筋ジストロフィー症リハビリテーションの基礎的研究	
筋ジスにおける筋力測定の標準化の研究（指定研究）	137
愛媛大学医学部整形外科 野島 元雄 ・ 首藤 貴 ・ 矢野 元雄	
愛媛大学医学部理学療法部 赤松 満 ・ 大塚 彰	
国立徳島療養所 奥村 建明	
国立西別府病院 吉田 祐三	
筋ジストロフィー症の看護の研究まとめ	141
国立療養所徳島病院 松家 豊	
勤務時間の改善を試みて	145
国立新潟療養所 高沢 直之 ・ 五十嵐 節子 ・ 小林 和美	
高木 百合子 ・ 藍沢 博子 ・ 須田 とし子	
近藤 キヨシ ・ 仲丸 ミス ・ 遠藤 イツ	
浅賀 真理子 ・ 江口 ユキイ ・ 山崎 信枝	

DMP児に適したADL評価表の検討	146
国立療養所西奈良病院 岩田真朔・山本篤子・酒井久子 他スタッフ一同	
筋ジス成人病棟における看護上の問題点と対策	149
国立新潟療養所 高沢直之・巻口雪江・藤田富子 渡辺キエ子・林マサ・有坂峯子 坂田八重・小潟真寿美・堤恵子 赤沢敏子・木賀京子・近藤ヨシ子 石田けい・伊原君代・千原美代子 稲又雅美・西尾れい子・三井田真利子	
先天性筋ジストロフィー症児の看護―遊びを通して―	151
国立療養所西多賀病院 湊治郎・高沢英子	
学校連絡帳をとおして―学校との連絡を密にする為の一手段―	152
国立赤江療養所 林栄治・萩原七穂・吉野郁子 古村茂美恵・三宅妙子・梶山幸子 谷口チミ子・松本町子・多田幸子 湯浅美恵子	
豊かな日常生活を送るためへの生活指導(学童への働きかけ)	154
国立療養所再春荘 小清水忠夫・桜井淳子・菊川公子 川口緑・大鷲千枝子・西田孝子 平山恵子・林一子・川端みどり 加来美千子・鮫島栄子・中野浩子 九重春代・久永三千代・米丸瑞子	
筋ジス患者の望ましい生活	156
国立療養所川棚病院 中沢良夫・金刺佐代子・中原フサエ	
臥床児の機能訓練について	158
国立東埼玉病院 井上満・黒岩正子・森下由美子 工藤やい・上野幸子・伊藤英子 荏原富美二	
成人筋ジストロフィー患者の寝具の工夫「エアーマットを試みて」	160
国立赤坂療養所 藤井舜輔・八山芳子・前田弘子 江口正信・森静香・乙藤恵子	
日常生活に密着した好ましい衣類購入のあり方	161
国立療養所南九州病院 乗松克政・郡山艶子・園尾美智子 原田さとの・笹川久美・中村タツ子 山下初子・松本照枝・春田節子 鳥丸ケサ子・堂園悦子	

理髪時における坐位の安定	165
国立療養所医王病院	松本 勇 ・ 石田てる子 ・ 新田 節子 小原 照子
筋ジストロフィー症の器具の開発抑制衣の考案	166
国立武蔵療養所	猪瀬 正 ・ 当間 節子 ・ 山本紀代子 音地 裕二 ・ 他7-1病棟看護婦一同
DMD児に電動車椅子を使用して(第3報)	168
国立療養所東埼玉病院	井上 満 ・ 大野美佐子 ・ 上野山せい子 松木きみえ ・ 高橋 孝子 ・ 斎藤 トミ 砂原美紀子 ・ 樋口 光江 ・ 後藤 雪美 厚木 智子 ・ 西條 美江 ・ 藤原 冊子 松浦 涼子 ・ 浜崎 睦美 ・ 磯貝紀久枝 和田 明子 ・ 高橋 一美 ・ 細谷 和子 黒須 ミツイ
PMD児(者)の自助具の研究 — 無線操縦装置導入のワゴン車の開発(2) —	170
国立療養所西多賀病院	湊 治郎 ・ 浅倉 次男 ・ 平松 治 大内 一則
筋ジストロフィー病棟における看護から見た環境衛生について(第3報)	172
国立徳島療養所	松家 豊 ・ 福本 静子 ・ 橋本しのぶ 小畠 君子 ・ 笹田 時子 ・ 笠井 秋子 乾 真弓 ・ 金田 正勝 ・ 谷 茂 福田 シゲル ・ 伊賀二美恵 ・ 吉尾千代子
患児の手の清潔度調査	174
国立療養所再春荘	小清水 忠夫 ・ 宗 朋子 ・ 藤岡美代子 高峯 泉 日置 孝子
DMD児の骨折予防に関する看護研究(第2報)	176
国立療養所東埼玉病院	井上 満 ・ 大野美佐子 ・ 松浦 涼子 西條 美江 ・ 浜崎 睦美 ・ 藤原 冊子 和田 明子 ・ 上野山せい子 ・ 樋口 光江 後藤 雪美 ・ 高橋 孝子 ・ 斎藤 トミ 厚木 智子 ・ 松木きみえ ・ 砂原美紀子 磯貝紀久枝 ・ 高橋 一美 ・ 細谷 和子 黒須 ミツイ

食事制限をうけているDMP肥満児のおやつについて	178
国立新潟療養所	高沢直之・五十嵐節子・外山友子 山本満子・井上陽子・福島ウメ 山崎麗子・小林千恵子・高橋郁子 中村直子・中野和
DMP児の食欲改善への検討 — 嗜好食を導入して —	180
国立赤坂療養所	藤井舜輔・浦川孝子・森山充子 中村輝子・浦田みどり・武末房子 光達ケイ子・荒牧征子・跡部高大 他病棟スタッフ一同
FLowシート活用による生活全般の方向づけ	182
国立新潟療養所	高沢直之・野方三和子・加藤ケイ 片山幸子・井比百合子・高野範子 片山清子・目崎八重子・清水春枝 赤沢信子・広瀬和美・中村良子
末期ケア（バイタルサインの測定方法とその評価について）	183
国立療養所刀根山病院	堀三津夫・森永しのぶ・河野兼子 上野芳江・佐内美津子・竹井ミハル
バイタルサインの測定とその評価について	185
国立療養所八雲病院	篠田実・大村サツキ・湯浅柄美子 野口房子・古川悦子・佐藤直従 加藤晴一郎
バイタルサインの測定とその評価	187
国立療養所南九州病院	乗松克政・阿久根ノブ・椎原玉乃 堂園敬子・林キリ・藤園喜美子 坂元和代・前山智子・春田節子 木ノ下弘子・岩間豊子・山下百合 吉永京子
バイタルサインの測定とその評価について — 夜間体位交換前後のバイタルサインの変化 —	189
国立療養所宇多野病院	森吉猛・佐藤茂美・山本芳枝 青田和恵・広川由紀子・他スタッフ一同
筋ジストロフィー症患者の体温、脈拍の測定値の変動特徴について	190
国立療養所原病院	和田正士・中村陽子・波野美智子 岡田成子・吉永孝子・星出充子 筋ジス病棟スタッフ一同

脈拍の測定条件における影響 — その1 —	198
国立赤江療養所	林 栄治 ・ 新城佳子 ・ 吉野郁子 菊知順子 ・ 宮内香代子 ・ 栴元鈴代 新原信子 ・ 甲斐悦子 ・ 森ロイツ子 安庭千代子 ・ 久木元美智子
末期ケアの研究（特にバイタルサインの臨床的把握による）	195
国立徳島療養所	松家 豊 ・ 佐藤民江 ・ 畑本洋子 久次米勝子 ・ 吉尾千代子 ・ 伊賀二美恵
バイタルサインとしての肺活量の検討	197
国立療養所再春荘	小清水忠夫 ・ 山田純子 ・ 沢田しず代 関 かね子 ・ 日置孝子
末期症状から見た末期看護ケアとしてのバイタルサインの検討	199
国立岩木療養所	森山武雄 ・ 七戸千恵 ・ 熊谷ハツ 永田文子 ・ 折戸谷初枝 ・ 岡田光博 佐藤郁子 ・ 太田尚子 ・ 乗田章子 小笠原妙子 ・ 船水哲子 ・ 棟方よしゑ 館岡フミ ・ 赤平栄子 ・ 佐藤一美 前田洋子 ・ 加藤悦子 ・ 福士花江 安田真砂子 ・ 乗田京子
PMD死亡患者記録からの考察 — 若年死亡患者と成人死亡患者の比較 —	202
国立療養所西多賀病院	湊 治郎 ・ 岩井幸子 ・ 小山勝次 浅倉次男 ・ 山田 満
末期症状から見た看護ケアの指標としてのバイタルサインの検討	205
国立療養所長良病院	古田富久 ・ 広瀬芳子 ・ 藤川光子
末期看護異常の早期発見の為の臨床的把握	208
国立療養所西別府病院	三吉野産治 ・ 萩原文子 ・ 植田博子 伊東初代 ・ 中野禎子
末期看護ケアの指標としてのバイタルサインの検討	211
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三 ・ 伊藤明美 ・ 曾根妙子 西村誓子
PMD末期患者の看護需要度について	214
国立療養所鈴鹿病院	河野慶三 ・ 曾根妙子 ・ 森美佐子
末期症状からみた末期看護ケアの指標としてのバイタルサインの検討	216
国立療養所宇多野病院	森吉 猛 ・ 安部文子 ・ 永田正彦 椎葉尚子 ・ 竹内智子 ・ 他スタッフ一同

末期症状からみた末期看護ケアの指標としてのバイタルサインの検討 217

国立東埼玉病院 井上 満 ・ 岩崎 とよ ・ 農中 裕美
成富 明子 ・ 中村 文美 ・ 大野美佐子
河西 信子 ・ 古橋 祐子

DMP患者の肺活量の検討 220

国立下志津病院 斎藤 篤 ・ 西沢志津江 ・ 小山八代子
朝重サダ子 ・ 近藤 やす ・ 三好 ミネ
高橋 美幸 ・ 石井キヨシ ・ 八ヶ代マル子
石渡 ハル ・ 池野 純子

末期症状からみた末期看護ケアの指標としてのバイタルサインの検討 222

国立療養所川棚病院 中沢 良夫 ・ 辻 純子 ・ 福成のり子
他筋ジス北病棟スタッフ一同

FLowシート活用による末期患者の看護ケアの方向づけ 224

国立新潟療養所 高沢 直之 ・ 野方三和子 ・ 桑山 智恵
加藤 ケイ ・ 渡辺 茂子 ・ 竹内 澄江
安達佳代子 ・ 風間 弘子 ・ 三浦 涉子

末期症状における看護ケアの試み その2 — 体位性ドレナージによる排痰訓練の効果 — ... 225

国立療養所兵庫中央病院 新光 毅 ・ 布野嘉代子 ・ 山口 敦子
堀 等 ・ 下田ユイ子 ・ 大嶺 静代
浅野 彩子 ・ 増田 隆子 ・ 神山 綾野
伊福由美子 ・ 水野 芳郎 ・ 木下 幸一
松本 孝一 ・ 田代 一恵 ・ 坂下はる美
安場 節子

排泄の看護 — 排泄に関する設備について — 227

国立療養所南九州病院 乗松 克政 ・ 笹川 久美 ・ 福重 幸子
竹元千代美 ・ 藤山 義則 ・ 原田さとの
後藤 良子 ・ 戎 昌子 ・ 白尾フヂ子
山下 百合 ・ 吉永 京子

座敷トイレの利用状況 230

国立療養所松江病院 中島 敏夫 ・ 坂田 和美 ・ 石田 芳子
他スタッフ一同

トイレの改良を実施して 232

国立療養所川棚病院 中沢 良夫 ・ 中原フサエ ・ 林 ヤス代
鶴羽アケミ ・ 嘉村 宏義 ・ 淵上 勝海
鈴田 久利

排泄の看護—排泄設備について— 233

国立療養所再春荘 小清水忠夫・中島恵子・西島寿一
沢田慶子・登山妙子・吉見エツ
増永幸恵・吉谷ゆう子・安陪真澄
渡辺せい子・米丸瑞子・大淵千枝子
川口緑・桜井淳子・菊川公子
西田孝子・平山恵子・鮫島栄子
加来美千子・道井ひとみ

成人筋ジス患者の車椅子便器車 235

国立療養所箱根病院 村上慶郎・松井澄子・谷口恭子
川瀬久代・鋤崎明美・古内文夫

車椅子便器車の改良 237

国立徳島療養所 松家豊・松原秋子・猪井和子
高島侑二・伊藤秀子・吉田ヒデア子
福田シゲル・田窪かず子・森加代
伊賀二美恵・高藤信江・中井健一
吉尾千代子

排泄看護の研究 その1 リクライニング便器車の開発 239

国立療養所兵庫中央病院 新光毅・勝田勇治・山口恵子
竹本誠子・丸橋信子・加登淑子
田中孝子・原田十九生

排泄看護(便坐の工夫) 241

国立療養所刀根山病院 堀三津夫・小谷啓二・原田千三
松本一男・内出登喜代・坂東千鶴
谷昭子・萩原律子・大田美知枝

排泄時に於ける体位保持補助具の改良 244

国立療養所医王病院 松本勇・石田てる子・中村宏
他スタッフ一同

排泄補助具の創意工夫 245

国立療養所松江病院 中島敏夫・山口静子

PMD車椅子使用患者の安楽な排尿方法を考える 247

国立岩木療養所 森山武雄・玉田ヤエ・松岡美智子
葛川真知子

便器排泄用補助具、介助具とそれに関連した介助方法について	249
国立療養所八雲病院	篠田 実 ・ 大村 サツキ ・ 湯浅柄美子 野口 房子 ・ 古川 悦子 ・ 佐藤 直従 加藤 晴一郎
パイプ式排尿器（移動式）について	251
国立療養所西多賀病院	湊 治郎 ・ 千田 武昭 ・ 長谷川 信雄 阿部 永子 ・ 佐藤 和美 ・ 川村 昭一
排泄看護の研究 その2 排泄用補助介助具の工夫	253
国立療養所兵庫中央病院	新光 毅 ・ 大谷美智子 ・ 松前よ志江 勝田 勇治 ・ 山口 恵子 ・ 前中 啓子 岸本加代子 ・ 兵庫 慶子 ・ 福田 久子 村岡 寿恵子 ・ 宮崎 千代子 ・ 栄田 弘美
当病棟における排泄異常の現状分析	254
国立新潟療養所	高沢 直之 ・ 野方三和子 ・ 加藤 ケイ 木村 キチ ・ 須田 紀美子 ・ 大橋 美智子 吉田 鈴子 ・ 黒崎 豊美 ・ 中村 哲子 山田 真美子 ・ 春日 直子
DMP 児の排泄異常の看護	256
国立療養所東埼玉病院	井上 満 ・ 成富 明子 ・ 富田 光子 千葉 たみ子 ・ 片山 道子 ・ 大塚 幸江
排泄障害因子除去の試み	258
国立療養所沖縄病院	大城 盛夫 ・ 喜瀬 久美子 ・ 伊礼 由美子 武富 米子 ・ 山田 久枝 ・ 山川 桂子
排泄の看護 — 便秘状況の実態調査 — 第1報	260
国立療養所下志津病院	斎藤 篤 ・ 宮沢 栄子 ・ 佐々木 文子 皆島 弘子 ・ 大野 信子 ・ 布施 とき子 高橋 恵 ・ 北野 明子 ・ 武田 恵津子
メディアプルーンの量と障害度、変形度による効力を調査し、便秘状態の改善	262
国立療養所原病院	和田 正士 ・ 奥水 美枝子 ・ 岡田 成子 吉永 孝子 ・ 星出 充子 ・ 他スタッフ一同
CMD（福山型）の排尿訓練（その2）	265
国立療養所西別府病院	三吉野 産治 ・ 佐藤 由美子 ・ 楠本 君江 後藤 真智子 ・ 鍵小野 マサ子 ・ 池田 秀子 梅木 まり子 ・ 衛藤 徳子 ・ 他スタッフ一同
DMP 低IQ児に排尿のしつけを試みて	267
国立療養所川棚病院	中沢 良夫 ・ 戸羽 澄子 ・ 鈴田 久利

排泄用ベッドに関する研究(指定研究).....		269
徳島療養所	松家 豊 ・ 栗本由己 ・ 東山 溪子 伊賀二美恵	
西多賀病院	川村 昭一 ・ 千田 武昭	
東埼玉病院	成富 明子 ・ 大野美佐子	
刀根山病院	大田 美知枝	
採尿器に関する研究(指定研究).....		278
徳島療養所	松家 豊 ・ 栗本由己 ・ 東山 溪子	
下志津病院	西沢 志津江 ・ 萩原ちえ子 ・ 河野 ユキ	
東埼玉病院	成富 明子	
兵庫中央病院	大谷 美智子	
松江病院	藤原 春枝 ・ 足立 弘子	
刀根山病院	大田 美智子	
南九州病院	吉永 京子	
栄養学的研究のまとめ		277
プロジェクトリーダー	弘前大学医学部 木村 恒	
ビタミンE欠乏モルモットによる筋ジストロフィー発現過程の代謝異常に関する研究		279
国立栄養研究所	山口 迪夫 ・ 平原文子 ・ 印南 敏 真田 宏夫 ・ 宮崎 基嘉	
ジストロフィーマウスにおける筋疾患の発現進行と栄養条件との関係		281
国立栄養研究所	山口 迪夫 ・ 真田 宏夫 ・ 宮崎 基嘉 平原文子 ・ 印南 敏	
筋ジストロフィー症における栄養動態の基礎的研究		284
愛媛大学医学部整形外科	野島 元雄	
愛媛大学医学部生化学第2	永井 克也 ・ 澄田 道博 ・ 奥田 拓道	
愛媛大学医学部衛生学	浜田 稔 ・ 渡辺 孟	
PMD患者のN出納と蛋白栄養状態 その follow up study		288
徳島大学医学部	新山 喜昭 ・ 大中 政治 ・ 坂本 貞一 岡田 和子	
国立徳島療養所	新居 さつき ・ 山上 文子 ・ 坂口 久美子	
PMD患者の無機質代謝に関する研究		290
徳島大学医学部	新山 喜昭 ・ 大中 政治 ・ 坂本 貞一 岡田 和子	

PMD患者における水溶性ビタミンの必要量に関する研究	292
徳島大学医学部	新山喜昭・大 中 政 治・坂 本 貞 一 岡 田 和 子
5 回食実施後の効果判定と今後の食事について	293
国立療養所東埼玉病院	井 上 満・佐 藤 元 一・三 田 誠 一 郎 小 林 由 美 子・山 田 明 子・武 田 ル ミ 子
進行性筋ジストロフィー症患者の食事形態と通過障害の関係	295
国立療養所箱根病院	村 上 慶 郎・岡 崎 隆・中 村 正 敬 直 江 国 雄・栗 原 稔・田 中 寛
DMP患者の体重曲線と偏食との関連性について	297
国立療養所原病院	和 田 正 士・寺 谷 恭 子・田 中 美 穂 子 高 橋 英 子・丸 石 美 紗 子
肥満傾向を有する患者に対する食事療法とその効果について	301
国立徳島療養所	松 家 豊・新 居 さ つ き・山 上 文 子 坂 口 久 美 子
進行性筋ジストロフィー症患者（者）の末期の栄養について（第2報）	303
国立療養所下志津病院	斎 藤 篤・佐 々 木 士・舛 谷 公 三 郎 田 中 徳 子・小 嶋 誠
筋ジストロフィー症末期患者の栄養に関する研究	307
国立療養所西別府病院	三 吉 野 産 治・城 戸 美 津 子・浅 井 和 子
食事指導について アンケート調査を実施して	309
国立療養所宇多野病院	森 吉 猛・鞠 山 紀 子・磯 本 峰 億 高 橋 邦 枝・藤 木 る り 子・山 崎 カ ヅ ヨ
筋ジストロフィー症患者の栄養指導について	310
国立療養所西別府病院	三 吉 野 産 治・城 戸 美 津 子・浅 井 和 子
入院外来者用栄養指針の研究	311
国立療養所東埼玉病院	井 上 満・佐 藤 元 一・三 田 誠 一 郎 小 林 由 美 子・山 田 明 子
在宅筋ジストロフィー症患者のための栄養指針の作成	314
国立徳島療養所	松 家 豊・新 居 さ つ き・山 上 文 子 坂 口 久 美 子
徳島大学医学部	新 山 喜 昭
PMD在宅患者の栄養指導に関する研究	315
弘前大学医学部	木 村 恒
徳島大学医学部	新 山 喜 昭

PMD患者の貧血に関する研究(3)	318
弘前大学医学部	木村 恒・北 武・丹羽厚子
国立岩木療養所	森山武雄
体力に関する研究 血圧測定法の検討(指定研究).....	321
弘前大学医学部公衆衛生学講座	木村 恒・佐々木直亮
	仁平 将・三上 聖治
体力に関する研究 PMD患者の体力測定に関する研究(指定研究).....	323
弘前大学医学部	木村 恒
国立療養所西多賀病院	湊 治郎・五十嵐俊光
国立療養所鈴鹿病院	河野 慶三
デジタル力量計による Duchenne型PMD患者の筋力測定	325
国立療養所鈴鹿病院	河野 慶三

序

筋ジストロフィー症の療育看護に関する研究は、心身障害研究補助金による「進行性筋ジストロフィー症の成因と治療に関する臨床的研究」（山田班）の成果を引き継いで、昭和53年、厚生省神経疾患委託費による研究組織の中でこの班が発足した。

本年度は、研究組織全体の参加するプロジェクト課題の他に、数施設の協同研究による指定研究課題をいくつか設け、内容の掘り下げと充実を期待した。

この班の研究においては、療護という名の示すように、筋ジストロフィー症の治療法がまだ確立されていない今日、絶えざる病気の進行を見つめながら療養生活を続けている患者の生命を維持延長するとともに、充実した人生を過すために如何なる療育看護を行うべきかということについて、医師の他、看護婦、指導員、保母、理学療法士、栄養士などのコ・メディカルの職員の研究を推進することが、その主たる目的と考えられるが、また、現場の職員が研究的意図をもって患者に接することが、そのまま患者の療護に益していることも、この研究の大きな効用といえることができる。

ここに本年度の研究成果報告書を刊行するに当たり、班員ならびに共同研究者の御努力と厚生省当局ならびに日本筋ジストロフィー協会の御指導と御協力に対して心からの敬意と感謝の意を表したい。

また、この間に夭折された貴い生命に対して心から哀悼の誠を捧げる。

班長 中 島 敏 夫

筋ジストロフィー症の療護に関する臨床社会学的研究

国立療養所松江病院

班長 中 島 敏 夫

進行性筋ジストロフィー症の心理障害、生活指導、看護、栄養及び療護に関する機械器具の開発に関して系統的研究を行い、本年度は、以下に総括する成果を得たので報告する。

I. 筋ジストロフィー症の心理障害、生活指導の研究（分担研究者 河野慶三ほか）

今年度も、心理障害、生活指導の研究は活発に行われたが、一定の結論を得るには、さらに検討を加える必要があると思われるものが多く、次年度に継続された。

1) ITPA：筋ジストロフィー患者の言語性IQ低値の要因を検討するために、ITPA（イリノイ式言語学習能力診断検査）を用いた研究が続けられてきたが、ITPAでみる限り、筋ジストロフィー患者の言語学習能力は、全体にサブノーマルであり、構造的な特徴は認められなかった。

2) ロールシャッハテスト：ロールシャッハテスト時にみられる筋ジストロフィー患者の初発反応の遅れは、患者が検査に対して無関心であるために生じているのではなく、他に本質的な要因があることが強く示唆された。

II. 筋ジストロフィー症の療護に関する機械・器具の開発（分担研究者 野島元雄ほか）

生活介助用具としては、重症者を対象として食事器具（もりつけ皿を微力で回転できるようにした）。プザー（微力で押せるよう改良した）などがあげられる。又、担架式（寒冷地を考慮し）の避難用具が工夫された。

また、本研究部門に関連する基礎的研究として、足関節変形について解析が行われ、Chopart lineとTaluse lineの間で尖内反足変形が著明であることが明らかにされ、脊柱側弯変形については、3次元解析が行われた。これらは向後の装具の開発に示唆を与えるものと考えられる。

次いで、上肢装具特に介助装具として大型のBFOが試作され、リクライニング式電動車椅子、三態（臥位、坐位、立位）式リクライニング式電動車椅子、更に電動式起立車が工夫された。これらは介護機器としての指向を示すものと考えられる。

脊柱変形矯正、増悪阻止のための躯幹保持用装具が種々工夫された。本症の病態の各個において差異のあるものであり、これらの研究を参考にしての各施設での追試、更に新しい構想を加えての試作が重ねられることを切望する。

また、本年度から指定研究として、リハビリテーションの基礎的研究が採用された。先ず筋力テストの実施状況についてアンケート調査が行なわれ、その中で、現在筋ジストロフィー患者の筋力テストとして最も多くの施設で採用されているダニエル法について、実施上の問題点、特に手指筋力の測定における困難性が指摘せられ、次いで、基礎的研究の第1段階として、水柱圧によって測定表示する微小握力測定装置が考案試作せられ、これについての基礎的検討がなされた。

Ⅲ. 筋ジストロフィー症の看護の研究 (分担研究者 松家 豊ほか)

看護に関して、臨床看護部門では共同研究として20施設が末期看護ケアについて検討をすすめられた。とくにバイタルサインの把握を中心に行なわれ、そのうちで頻脈は共通した見解で最も重視された。このことは末期症状の全国的調査研究と併行してその対策の検討が行われつつある。基本的問題として、体温、呼吸、血圧などのバイタルサインについてその測定や変化の適確な把握が示された。

昭和40年筋ジ施設が開かれてから全国施設での死亡者は552人にのぼっていることがわかった。これらの記録をもとに末期症状の種類、頻度、時期などの調査研究がすすめられつつある。このことについて、2、3施設からの報告が行われた。しかし、最終的には対象を全国的に拡大して末期看護ケアの指針をつくり、あらためて予防対策や末期看護の手順の確立をめざしている。

排泄の看護について22施設が、設備、介助、器具、用品、便秘対策などを共同的研究として行なった。なお、排泄用ベッド、採尿器について8施設が同じ目的で研究評価した。

障害度が異なる場合の設備や介助は画一的なものは不可能である。しかし大筋の体系は得ることができる。即ち排泄の自立への方角、介助の省力化が推進されている。また、患者の便秘の解決方法について基礎的に取組んでいる。何れにしても障害のつよい者では疾病に由来する要素が大きくその対処は容易でない。末期や排泄の看護ケアはそれぞれ重症化に対応した研究として高く評価される。

各施設単位の研究では看護管理面の向上について患者、看護の両側からのアプローチがみられ、生活指導の援助についても直接毎日の業務として身近かな問題がとりあげられ、とくにCMDに対する療護も含めた新しい試みがみられる。看護にまつわる器具や用品についても積極的に改善がすすめられている。生活の場であるためのよい施設環境づくりや、家庭的満足に近づけるための衣食の研究など、施設という制約内ではあるがよりよい生活の場づくりの努力が十分にうかがわれる。

患者の多様化、重症化という現状のなかで、臨床看護もふくめた筋ジ看護体制の充実が年毎に斬新さを加えていることは、本研究班の成果であり、また、施設相互間の協調をすすめることにも役立つと思われる。

Ⅳ. 筋ジストロフィー症の栄養の研究 (分担研究者 木村 恒ほか)

前年前、10余年の研究成果の集大成ともいえる進行性筋ジストロフィー症食餌基準書を作成し、医療関係者に配布した。本年は在宅患者の栄養指導、体力測定法の開発、栄養の基礎的研究に重点を置いた研究成果を以下3項目にまとめることができる。

(1) 在宅筋ジストロフィー症のための栄養指針の作成 (指定研究)

在宅患者とその保護者にわかりやすい栄養読本「筋ジストロフィー症の人たちの養護のしおり——健康と栄養——」を作成し、昭和55年度には関係機関に配布する予定である。

(2) 筋ジストロフィー症に適する体力測定法の開発 (指定研究)

市販のデジタル筋力計を改良し、個別筋群が測定出来る多目的筋力測定台を考案し、さらに簡易型筋力計を開発して臨床応用へのめどをつけた。

(3) その他

イ) 栄養に関する基礎的研究

E欠動物の過酸化脂質含量の測定、ジストロフィーマウス骨格筋のプリンヌクレオチドサイクル酵素の動向、PMD患者の脂質代謝に関する酵素の検討、N出納のfollow up study、貧血の発生原因の追求、新たに無機質代謝及びビタミン必要量の研究が加えられた。

ロ) 栄養改善及び栄養調査研究など

1日5回食の試み、食事形態と咀嚼、嚥下障害の問題、体重発育と偏食の関係、肥満者の食事療法、末期患者に対する食形態と栄養必要量等が調べられた。

ハ) 栄養指導に関する研究

食事指導をおこなうための資料としてのアンケート調査、院内栄養指導の実施状況、外来患者用栄養指針の作成、帰省中患者の栄養調査成績等が報告された。

筋ジストロフィー症の心理障害、生活指導の研究のまとめ

国立療養所鈴鹿病院

河野慶三

昭和54年度も、筋ジストロフィーの心理障害、生活指導の研究は活発に行われ、その成果が発表されたが、第二年度であることもあって、まとまった結論の得られたものは少なかった。

Duchenne型PMDにみられる言語性IQ低値の要因を検討するために行われていたITPA（イリノイ式言語学習能力診断検査）のまとめとして、寺田ら（西別府）は、心理言語指数を健常対照群と比較した場合、どの回路、過程、水準でも、その値が20～30低く、下位検査プロフィールでも同様であることを示した。ITPAでみる限り、PMD患者の言語学習能力は全体にサブノーマルであり、これといった特徴はみられていない。

小笠原ら（鈴鹿）は、筋ジストロフィー患者の記憶能力を知ることがを目的に、数字を用いた記憶実験を行った。同年健常者に比べると明らかに記憶能力が低く、WISCのPIQの値との関係が強いことが示唆されたが、対象例数が少ないので、対象を拡大して継続研究されることになった。

知能に関連した研究は、この他に三好ら（八雲）、佐藤ら（愛媛大）、藤井ら（西多賀）、西村ら（南九州）などのものがあるが、データのとり方、処理法などに改善の余地があり、次年度を期待したい。

鈴鹿病院のグループは、筋ジストロフィー患者のボディー・イメージの研究を続けており、今年度もQDA法（quantitative descriptive analysis method）による調査結果を報告した。自己身体イメージの評価については、全体として極端な偏りを示さなかったが、障害の進行した末期群で評価が低い方へ偏る傾向がみられたという。この研究も対象例を増し、対照群との比較を行うことにより、さらに進展するものと思われる。

さて、筋ジストロフィー患者では、ロールシャッハテスト時の初発反応時間が著明に延長することが知られている。宮崎ら（鈴鹿）の実験でも、この点が再確認された。さらに、ロールシャッハ検査の被験者に与える心理的影響をみる目的で、心拍数の測定が行われているが、安静時に比べると明らかに心拍数は増加しており、検査時の心拍数は休憩時のそれを常にうわまわっていた。これらのことより、筋ジストロフィー患者の初発反応の遅れは、検査に対する被験者の無関心、非協力によるものではなく、別の要因を考える必要があることが強く示唆された。

生活指導の部門でも様々な実践が行われているが、研究成果としてとりあげるレベルには到達していないというのが卒直な印象である。この領域の研究の方法論的な困難さは十分承知しているけれども、保母・指導員諸氏の奮起を期待したい。

PMDの知能に関する研究

有意味語及び無意味音から連想されることばに関する考察

国立療養所八雲病院

篠田 実 三好 力
阿部 一男 増田 寿雄

進行性筋ジストロフィー-Duchenne型の知能については、数々の報告があり、総じて検査結果として低値を示す傾向があるとされている。特にWISC知能検査については、言語性IQが動作性IQに劣るといわれている。また我々の行ったITPA言語学習能力検査では、聴覚-音声回路に問題がある事を報告した。

そこでこの度、この言語の問題に焦点をあて実験を試みたので報告する。

当初、本研究では有意味語と無意味音に関する検査を行う予定であったが、検査内容を検討したところ、小学生では反応が乏しい事が予想され、反応を最大限に導き出す事を第一に考え本研究の予備段階として次のような実験を試みた。

〔方法〕

5つの刺激音を提示し、その刺激音が頭につく言葉をできるだけ多く反応させる事である。刺激音として母音を選んだ。

〔対象〕

当院入院中のDuchenne型患児（小学生）全員に検査を施行したが、検査の意味がわからなかった者、各学年で3名以上となる事を原則としたところ、1年生、4年生、6年生各々3名となった。

Controlとして、八雲小学校1年生から6年生までの各学年について無策意に各々5名を選び検査を施行した。その中からDuchenne型と同様、1、4、6年生の各5名をControlとした。

検討内容としては、反応数をみる事、反応語の種類、刺激音提示から初発反応語が出るまでの時間とした。

〔結果〕

反応数では、全体的にみるとControlより少いが、学年別にみると6年生でControlを上まわる結果を得ている。内容的にも学校で学習されたと思われる言葉もみられControlとの間に目立った差はみられなかった。

これは予測に反した結果であり、従来経験が浅く言葉が少いといわれてきたが、Duchenne型患児の現在の生活が言葉の面に影響を与えていないと考えられる。しかし、反応語の中に「ABC」「イロハ」等意味のもたないものも言葉としている点に問題を残している。

図1.

反応した言葉の種類であるが、一応名詞とそれ以外に分けた。Controlに比較して、各学年共に

